

主 文

原判決を破棄する。  
被告人を罰金五〇、〇〇〇円に処する。  
被告人において右罰金を完納することができないときは金五〇〇円を一日に換算した期間被告人を労役場に留置する。  
当審における訴訟費用は被告人の負担とする。

理 由

本件控訴の趣意は、盛岡地方検察庁検察官検事鹿道正和名義の控訴趣意書記載のとおりであり、これに対する答弁は、弁護士山中邦紀名義の答弁書記載のとおりであるから、これらをいずれも引用する。

控訴趣意について

論旨は要するに、本件公訴事實は被告人が昭和四三年八月一二日午前一一時一五分頃大型乗合自動車（以下「バス」という。）を運転してA駅前広場バス発着所から同駅前車庫に向け左方へハンドルを切りつつ発進するに際し、同所付近はバスの乗降客等の通行が多いのに、自車の前方および左右側方を、自らはもとより同乗中の車掌にも注視させて周囲の安全を十分確認してから発進すべき業務上の注意義務を怠り、左前方の確認を欠いたまま漫然発進して左方へハンドルを切った過失により、同所にいたB（当五七年）を発見できず、自車左前部を同女に衝突、転倒させたうえ左前輪で轢過し頭蓋開放性粉碎骨折等により同女を即死させたというのであり、これに対して原判決は、本件発進に際して被告人は通常行なっている程度の安全確認の方法すなわち車掌の発車オーライの合図を聞いて運転席から右側と前とを窓越しに見たのち車体前部左角につけてあるバツクミラーとアンダーミラーを見たが歩行者は視野に入らないように見えたので警笛を鳴らし発進したもので、被告人自身が発進時における左前方の注視をおろそかにしたため被害者の姿を見落とし認めべき証拠は十分でない点に被告人の過失を認めがたく、むしろ被害者は発進当時車体左角付近の死角の範囲内にいて被告人の視野には入らなかったと認めべき蓋然性が高く、同乗の車掌の定位置からはその死角の範囲内はほぼ見通しうるもので車掌が被害者の姿を見落して発車合図をした疑いが強いのであるが、運転手としては、道路が雑踏している場合、障害物がある場合、幼児がバスの周囲で遊んでいる場合など特に危険が予想される事情があるときは車掌に特に指示して進行の安全を確認させべき義務があるけれども、そういう事情のない通常の発進の場合には、車掌は自らの責任においてその分担範囲の安全確認の注意をつくすべきであり、車掌がドアを閉め発車の合図をしたときは、これが信頼できないような特別な事情のない限り、運転手としては、車掌の分担する範囲の安全確認は行なわれたものと信頼して、自ら前方等の確認をなしたうえで次の動作に移ることが許されるものというべきであり、本件において車掌の発車合図を信頼すべきでなかつたと見るべきほどの事情があつたとは認められないので、死角内の安全を車掌に特に指示して確認させることなく発進した点に被告人の過失があるとするこゝもできない旨判示して被告人に無罪の言渡をした。しかし、バスの安全運転の責任は全般的に運転手自身が負うべきもので、車掌をして周囲の安全確認を補助させるときも両者の安全確認義務は重疊こそすれ排他的な関係にあるものではなく、唯運転手が安全確認をする限度およびその具体的方法は当該具体的状況に応じて決まり一概には論じえないだけのことであるというべきである。しかるに原判決が、車掌の同乗するバスの運行に際し、一般的に、車掌の安全確認分担範囲を認め、運転手は車掌の発車合図によりその範囲の安全確認がなされたものと信頼してよく、その合図が車掌の注意義務懈怠によるものであるときは運転手には責任がない旨判示したのは、注意義務に関する法令の解釈適用を誤つたものであり、また、特に証拠上明らかな本件事故現場の状況に照らせば本件はまさに車掌の発車合図を信頼できない場合であつたと認めるべきであるから、原判決にはこの点で事実の誤認があり、これらの違法は判決に影響を及ぼすことが明らかで、原判決は破棄を免れないというのである。

よつて記録を精査し原判決を検討するに、本件公訴事實に対し原判決がほぼ所論指摘のような理由をもつて無罪を言渡したことが明らかであるところ、原審取調べの証拠を総合して本件事故発生状況を考査すると、ほぼ原判決が確定しているとおり、被告人はCバス株式会社D営業所勤務のバス運転手として、公訴事実記載の当日、同会社の大型バス（岩〇く〇△×号）を車掌Eと組んで運転し、盛岡市内の循環路線を走行して午前一一時一五分頃終点であるA駅前広場バス発着所に到着し、乗客を全部降ろしたのであるが、車掌のEが乗客の降車を扱っている間、被告人は車体右前部の運転席に座つたまま辺りを眺めながら休んでいる状態であり、次





車合図をそのまま信頼して妨げないと解するのは早計であり、運転者は車掌に特に指令を命じてその部分の安全を仔細に確認させ、その上での発車合図を待つて初めて発進をなすべきものと解するのが相当である。ひつきよう自動車運転者は自己の指揮下に運転の補助的業務に従事するにすぎない車掌については極めて限局された限度内でのみ信頼が許されるにとどまるべきものである。原判決で、バス発進に際し車掌の発車合図に従うほか運転者が車掌に特に指示して車体左前側方附近の死角内の安全確認をさせるべき注意義務の有無について法律的理解を示しているところは、重点の置き方に若干の差異があり、にわかには同一見解をとり難いが、前記のごとく車掌の確認行為を信頼しても必ずしも不当とはいえない場合の存する意味においてこの点の原判決に所論注意義務の解釈適用を誤った違法があるとまでは必ずしも認め難い。

〈要旨〉しかし、さらに進んで所論事実誤認の主張につき考察すると、原審取調の証拠によれば、本件事故現場であく要旨るA駅前広場の前記会社バス発着所は、同広場のコンクリート舗装の平地に乗客の待合せ位置を指示する五本の白線を引き、各白線の先端に行先案内の標識を置いて駅舎寄りから順次一番線ないし五番線の乗り場としたただけのもので、歩行者の安全地帯が発着所の周囲にはあるものの発着所内には安全地帯も乗降客の通行のため専用区劃も設けられておらず、深夜を除いて一日に多くのバスが発着するので、かねて乗降客の往来が絶えない場所であつて、この場所的特殊性は特に注意すべき点であること、被告人が同発着所に到着して本件バスを停車させた位置は、発着所内のほぼ中央で三番線の白線の手前であり、被告人は終点のため十五、六名の乗客全員を降ろして、そのあと車庫入りのため、車掌の発車合図で発進しようとしたのであるが、その間駅舎の方へ向かう降客らは、駅舎バスの右手に位置したことにより駅舎中央の乗車口はバスの右前方の方角にあたる関係で、停車中の本件バスの前や後こに前方を廻つてそちらへ向かうのが通常の状態であり、折から降車終了後間もない時点でもあるのに、その際被告人の考えた進行経路は、発着所内での通常のバス進路である前記白線沿いにそのまま直進して車庫入りするというのではなく、たまたま左前方の白線附近にバス待ち客の列も見当たらないところから、従来そのような車庫入りに際し危険のないことが確認されたときは往々やつていたごとく、発進と同時に左前方へ進路を転じつつ斜めに発着所内をやや横断して車庫に向かうという経路をとるつもりであつたものであつて、この左前方への進路転向の点も特に重要な点であること（現に被告人は発進と同時に左前方へ転進し、三番線と四番線の各標識の周辺を通り抜けるべく斜めに運転進行したのである。）がそれぞれ明らかであり、これらは当審における事実取調の結果によつても一層明瞭であつて、このような事実関係に照らし考察すれば、本件被害者が前認定のような行動をとつたことすなわち本件バスから降りた同人が駅舎の方へ向かうべく被告人の発進時には未だバス左前側方附近の死角圏内に位置し、その後バスの進行につれて（付き従う形）前へ若干歩行し前記衝突地点にまで至つたというのも、バスがその際直進してさえおれば同人との衝突は生じえなかつたと認めうる状況であつたことよりすれば、同人の右行動は駅舎の方へ向う降客の一人として通常とる行動とみられるのであつて特段に責められるべき不注意、不適切な点とはなく、してみると、このような左前側方附近の死角圏内に位置する降客の存在および同人のその後の歩行経路は、発進にあたり被告人の当然に予見しうるところといふべく、しかも被告人は発進と同時に特に左前方へ進路を転じつつ斜めに進行しようとして企図していたのであるから、まさに被告人にとつては、本件発進にあたり、左前側方の死角内に関して危険の発生が客観的に予想される特別の事情があつたものと認めるに十分である。なるほど原判決認定のごとく当時バス発着所附近の人通りはバス待ちの人が若干いたほか歩行者は多くはなく、閑散な方であつたとは証拠上認められるものの、そのような事実が直ちに右結論を左右するものと到底考えられない。

してみれば、先に説示したところにより、車掌の発車合図に接した被告人がハンドルを特に左方へ切りつつ本件発進をなすに際しては、左前側方の安全確認に関し自ら肉眼やバックミラー等で注視するほか車掌の右合図に直ちに信頼依拠してよいとすることは到底できない筋合であり、被告人にはさらに車掌に指示して左前側方の死角内の安全を十分に確認させるべき業務上の注意義務があつたといふべきである。そして被告人が右業務を履行していれば本件事故の発生はこれを回避することができたものと証拠上認めるに難くないといふべきであるから、本件につき被告人が右注意義務の懈怠による過失の刑責を負うべきことは明らかである。

しかるに原判決は、自動車運転者が発進に際し車掌に特に指示して安全確認をさ

せるべき義務を負担する要件たる「特に危険が予想される事情があるとき」とは道路が雑踏している場合、障害物がある場合、幼児がバスの周囲で遊んでいる場合などであつて、本件はこれらのいずれにも該当せず、通常の発進の場合であると考へられ、車掌の発進合図を信頼すべきでなかつたと見るべきほどの事情があつたとは認められないと判示し、被告人が死角内の安全を車掌に特に指示して確認させるとなく発進した点に過失はないとして無罪を言渡したのであつて、右は判決に影響を及ぼすことの明らかな事実の誤認ひいては法令の解釈適用の誤りを冒したものである。論旨は結局理由がある。

よつて、刑事訴訟法第三九七条第一項、第三八二条、第三八〇条により原判決を破棄し、同法第四〇〇条但書に則りさらにつぎのとおり判決する。

(罪となるべき事実)

被告人は、かねてよりバス運転手として自動車運転の業務に従事していたものであるが、昭和四三年八月一二日午前二時一五分頃、勤務先Cバス株式会社の大型乗用自動車（GH年式バス）（岩〇く〇△×号）を運転し、盛岡市a b番c号先国鉄A駅前広場のバス発着所から発進するに際し、車掌Eの発進合図はすでになされたものの、最前十五、六名の乗客全員を終点のため降ろし終つたばかりで、右手駅舎の方へ向かう降客らにおいて附近に専用区劃もないこととて自車前方へ回つてそちらの方へ向かうのが通常の状態にあり、しかも被告人は車庫入りのためその際特に左方へハンドルを切りつつ発進しようと考えていたのであるから、このような場合、自動車運転者としては、これら具体的な諸状況に思いを致し、そのまま発進するにおいては折から自車左前側方附近の死角内にいることの予想される降客と左前方において衝突するに至るべきことを予見し、そのような事態の発生を回避するため、車掌に特に指示して同死角内の安全を十分に確認させるべき業務上の注意義務があるにもかかわらず、被告人はこれを怠り、前方および左右側方を自ら肉眼ならびにバツミラー等で見たのみで危険はないものと轻信し、警笛を鳴らして、そのままハンドルを左方へ切りつつ漫然発進した過失により、左前方約二・五五メートルの地点において、折から発進時には同死角圏内に位置しバスの進行につれて右地点に至つたものとみられるB（当五七年）に気づかないまま自車左前部をこれに衝突させ、同女をその場に転倒させたうえ左前輪で轢過し、よつて同女をして頭蓋開放性粉碎骨折等により即死させたものである。

(証拠の標目) 省略

(法令の適用)

被告人の判示所為は刑法第二二一条前段、罰金等臨時措置法第三条に該当するところ、本件被害結果はまことに重大であり、被害者は当時右眼を煩つてはいたものの本件事故の発生につき同女の特段の落度があつたとはにわかに認められず、また車掌Eについても事故発生の態様に徴しさほどの過失を同人に帰しがたい面があり、これに対して被告人の過失の程度は必ずしも軽くはなく、被告人には交通事犯による罰金三回、科料一回の前科もあるのであるが、他面、事故当時は現場附近の人通りは多くなく閑散な方であり、被告人はそのような状況に気を許し、また従来は本件における程度の注意で格別の事故も起さずに済んできたという過去の事蹟による安心感にわざわいされて、慎重さを欠き、図らずも今回は重大な事故を惹起するに至つたもので、その経緯には酌量すべき情状もあると認められること、その他被害者の遺族との示談成立の状況等諸般の情状を検討考慮のうえ所定刑中罰金刑を選択しその金額の範囲内で被告人を罰金五〇、〇〇〇円に処し、被告人において罰金を完納することができないときは刑法第一八条により金五〇〇円を一日に換算した期間被告人を労役場に留置することとし、当審における訴訟費用は刑事訴訟法第一八一条第一項本文によりこれを被告人に負担させるものとする。

よつて、主文のとおり判決する。

(裁判長裁判官 細野幸雄 裁判官 深谷真也 裁判官 桜井敏雄)